

【講演】

## 横須賀市自然・人文博物館の半世紀

林 公義\*

Masayoshi HAYASHI

横須賀市博物館館長の林でございます。本日は全日本博物館学会創立30周年、誠におめでとうございます。と言ってそのすぐ後ろにつけさせていただきますが、私どもの横須賀市自然・人文博物館が今年で、正式には7月だったのですが、満50周年を迎えました。私が現館長ではありますが、横須賀市の博物館開館以来、6人の館長がこちらのほうで執務されてきたわけで、私は6人すべての館長に仕えました。そういう中で今日与えられましたタイトルが「横須賀市博物館の半世紀」ということですが、私にその話をさせるのはなかなか厳しいなど。もう少し適切な方がいらっしゃるのですが、現館長としては何とか50年の歴史をまとめなければいけないという責務もあるでしょう。大変僭越でございますが、横須賀市の博物館につきましてはさまざまな諸先輩、諸学芸員、先代の館長を初め、皆様方にご協力いただいておりますので、今日の私の話で博物館の50年をすべて語り尽くすことはできないと思いますが、とりあえず与えられた時間の中でできるだけコンパクトにまとめてみました。

今日こちらで紹介しますプレゼンテーションは、本当に博物館の50年を駆け足で、どのようなことをやってきたのかということについて説明させていただきたいと思います。今、博物館運営懇話会という会を4年ばかり続けて開いております。横須賀市の博物館の今後のあり方についてさまざまな角度からいろいろな意見を聞いて姿勢を正して再スタートしようではないかというつもりでおります。それらの提言書も今年度末には上がりますし、博物館50周年を記念して博物館としては初めて「要覧」を製作いたします。また出版できましたら皆様のお手元にお配りすることもあろうかと思っておりますので、その節はよろしくお願いいたします。それでは説明に入らせていただきます。

---

\*横須賀市自然・人文博物館館長

全日本博物館学会30周年 横須賀市自然・人文博物館50周年記念シンポジウム

# 博物館の源流と先端

講演会 横須賀市博の半世紀



図1

## 横須賀市博物館のおいたち

1948・S23

横須賀市郷土文化研究室の設置（市教育部）

1954・S29

横須賀市博物館の開館（市教育委員会）

1959・S34

市博物館付属馬堀自然教育園の開園

1966・S41

市博物館付属天神島臨海自然教育園の開園

1970・S45

横須賀市自然博物館の開館・久里浜分館

1976・S51

重要有形民俗文化財収蔵庫の開設

1983・S58

横須賀市人文博物館の開館（自然・人文博物館）

1999・H11

天神島ビジターセンターの開設

2002・H14

ヴェルニー記念館の開館

図2

---

ここに博物館の写真がありますが(図1)、これは現博物館ではございません。久里浜に横須賀市博物館としてオープンした時の懐かしい写真です。と申しますのは、ここが玄関口になっているところですが、この玄関を私は小学校4年のときにくぐりまして、以来この玄関を何度通ったことか。とうとうこの博物館へ現在も通っているという状況で、50年という歴史の中で私が博物館にかかわった部分が40年近いのではないかという気がします。何か非常に恥ずかしいと同時に懐かしい写真なので、皆さんに横須賀市博物館の久里浜時代の写真を見ていただいております。博物館についてどういう形式で紹介して行くかということもありますが、とりあえず50年の歴史を簡単に振り返っていきたいと思います。

「横須賀市博物館のおいたち」ということですが、ここに示したように(図2)、1948年(昭和23年)に「横須賀市郷土文化研究室」が設置されました。当時、今は教育委員会ですが、市教育部という組織の中に入っておりました。現在も博物館は横須賀市教育委員会生涯学習部に所属しております。文化研究室の開設から、1954年(昭和34年)の「横須賀市博物館」の開館までの間に、自然と人文にかかわる調査や資料収集がかなり行われております。ですから、まだ展示という状況にまでは至っていなかったものの、当時集められたものはすべてこの郷土文化研究室で資料の保存を行っていましたし、さらには、既に「猿島」の報告書や、後に初代館長になれる羽根田先生の「発光生物の話」とか、郷土文化研究室時代としての印刷物が何冊か出版されております。博物館活動につきましては展示活動は行っていないまでも資料の収集活動や調査研究活動は非常に活発だったと言えます。主な活動フィールドは三浦半島全体を扱うという状況で行われ、1954年、「横須賀市博物館」として先ほど紹介した写真としての建物が開館し、横須賀市の博物館活動が正式にスタートするようになります。

1959年(昭和34年)には横須賀市の博物館「附属馬堀自然教育園」を開園しております。この矢印があるものは現在も施設として続いているということになります。この馬堀自然教育園と天神島ビジターセンター、天神島臨海自然教育園のそれぞれの教育園につきましては、生い立ちとさまざまな管理運営や、博物館と同じような普及活動等も行っていますので、こちらも全部詳しく話しますと2泊3日では語れないような状況になりますので、今回は本館だけに話を絞らせていただきます。皆様に今日お配りした資料の中にそれぞれの教育園の解説等がありますので、そちらをまたご覧いただきたいと思います。

その後1966年(昭和41年)には横須賀市博物館「附属天神島臨海自然教育園」を開園しております。こちらの馬堀は森の自然教育園、天神島は海の自然教育園ということで、国立科学博物館は目黒区に大変立派な自然教育園を開園しておりますが、博物館自体が教育園を持つということが当時としては非常に珍しいことだと思います。そういう中で横須賀市の博物館は、欲張っていたわけではないのですが、森の教育園と海の教育園という両教育園を管理・運営する機会をもつようになりました。

やがて博物館自体の規模が非常に狭くなってきましたので、現横須賀市自然博物館を開館し、久里浜の博物館は分館として、主に考古資料や民俗資料を収蔵展示する分館として引き続き開館しておりました。やがて1976年（昭和51年）には「重要有形民俗文化財収蔵庫」を国の補助金を得て開設し、その後1983年（昭和58年）には現人文博物館を開館しております。

その後1999年（平成11年）、つい最近ですが、天神島臨海自然教育園が天候の状態によっては利用できないということから、兼ねてより施設が欲しいという中で、神奈川県より施設の委譲を受け、現在は「天神島ビジターセンター」として開設しています。さらに2002年（平成14年）には「ヴェルニー記念館」を開館し、現在では本館を含めて二つの分園と二つの分館を合わせ持つて運営しております。


「博物館の使命」ということがここに書いてあります（図3）。先ほど教育長のご挨拶の中にも「博物館の運営の方法について」ということがありましたが、ここに示してあるのは、1948年（昭和23年）当事の横須賀市郷土文化研究室の印刷物で、その中の博物館運営方針という部分を抜粋してみました。「横須賀郷土文化研究室は、地域の人文・自然の両面にわたり研究調査を進めると共に、資料収集にあたる。貴重な各種の文化財をできるだけ収集し、丁寧に保存すると共に、之を一般に公開展示して市民や児童生徒に対しては教養を高める資料とし、篤志研究者に対してはよき研究資料とし、他面市を訪問する人々に対しては意義のある観光施設と

### 博物館の使命

#### 横須賀市博物館の運営方針

横須賀市郷土文化研究室は、地域の人文・自然の両面にわたり研究調査を進めると共に、資料収集にあたる。貴重な各種の文化財をできるだけ収集し、丁寧に保存すると共に、之を一般に公開展示して市民や児童生徒に対しては教養を高める資料とし、特氏研究者に対してはよき研究資料とし、他面市を訪問する人々に対しては意義のある観光施設とすべきである。

1948・S23



#### 自然・人文博物館の運営方針

本館は三浦半島を中心とした自然・歴史の博物館です。市民文化の創造・発展に寄与する地域の博物館として次の目標のもとに運営しています。

- 三浦半島の自然と人の歴史をわかりやすく展示する。
- 資料を収集して分類整理し、学術資料として活用すると共に永久に保管する。
- 研究機関としての役割を担う。
- 生涯学習の場と機会を市民に提供する。
- 学校教育に役立てる。
- 自然と文化の遺産を保護する立場にたつ。

2004・H14

図3

---

すべきである」という一文があります。これはまさに現在、皆様にお配りしてあります2004年（平成14年）のパンフレットにある「横須賀市自然・人文博物館の運営方針」に書いてある内容と寸分たがわないといえますか、言葉じりは多少変わっていますが、ここで示したオレンジ色の用語の部分が、随所に現在の博物館運営方針の中にも取り入れられています。

ということは、久里浜時代に概ね横須賀市博物館の基本的な使命や、博物館とは何をすべきところであるか、地域博物館として何をすることが横須賀市博物館らしいかということが明確に打ち出されました。今学芸員は8名おりますが、学芸員の活動に当たってもすべてこの博物館運営方針に基づいているという状況です。本当に50年たっても運営方針が全く変わらないというのは喜ぶべきことであろうと思いつつも、場合によってはそろそろ改変が必要なのかなとも考えますが、50年の歴史の中でよく守られてきている博物館の使命だろうと思います。

次に展示教育普及事業のほうの展示に関して、若干その歴史を振り返ってみたいと思います（図4）。常設展示ですが、久里浜時代はほとんど常設展示の内容を更新していることはありません。資料が増えれば増えたなりに部屋のあちこちに点在するような形で展示室を改造したという状況ですので、私の記憶の中では抜本的な常設展示の更新はあまりしていなかったと感じています。こちらの自然博物館に移ってからはいわゆる展示手法を考慮した展示形式になり、始めて意識した展示づくりをしました。

そういう中でやはり常設展示というのはある時期をみて更新をかけなければいけないというのはよく理解しているのですが、なかなかその機会がつかめないという状況です。開館してからは1978年（昭和53年）に、自然館3階に「珍しい標本コーナー」を開設し、相模湾の海底地模型を新装してからは、あと16年の間に部分更新が行われただけです。最終の常設展の更新は1993年（平成5年）の自然常設展示3コーナーを部分改修したに止まり、フロアごとの大規模な常設展の更新は一度も行われていない状況です。博物館によく足を運ばれる方には「もうそろそろ展示の内容が古いんじゃないか」「展示されている標本がくたびれてないか」とか、いろいろ指摘を受けますが、まさになかなか常設展示の更新ができにくいというのが現状でした。これは予算的な問題もあれば同時に、後ほどその詳しい理由については述べさせていただきますと思います。

あと企画展示を行っています。1986年（昭和61年）に「世界の美しい昆虫」というテーマで始めてから、18年間に47回更新しております。平均して1年に大体3～4回の更新を行っております。この更新は主に自然部門が担当している部分で、内容としては地球科学から帰化生物まで、さまざまな展示内容の更新を行っております。

特別展示につきましては、横須賀市の博物館では大変珍しい記録を持ってまして、1983年に人文博物館が開館するまで一度も特別展を実施したことがないという状況でした。人文博物館の施設機能に特別展示室を設け、21年間で37回開催してきました。自然科学系が17回。一番



## 常設展示



1978 (S53) 年 「珍しい標本」コーナー開設・相模湾の海底地模型の新装



16年間で7回の部分改修

1993 (H5) 年 自然常設展示3コーナーの部分改修

## 企画展示



1986 (S61) 年 「世界の美しい昆虫」



18年間で47回の更新

2003 (H15) 年 「三浦半島の海藻」

地球科学 5 植物 4 菌類 7  
海藻 2 昆虫 16 哺乳類 1  
鳥類 2 水生生物 9 帰化生物 1

## 特別展示

1983 (S58) 年 「黒船の来襲」



21年間で37回の開催

2003 (H15) 年 「三浦半島の花と緑」

自然科学系 17回  
相模湾と貝類学・ニュートリノ展ほか  
人文科学系 18回  
古代のムラ・近代日本外交の始まりほか  
自然・人文科学系 2回  
天神島の自然と歴史・縄文時代の人と自然

図 4

## 博物館職員の変遷

1954 (S29)～1966 (S43)

館長

学芸職 1名

学芸員 2～3名

植物・動物・地学

事務職 2～3名

研究員 2～5名

自然部門 2～3名  
人文部門 2～3名

研究委託 5～7名

化石・貝類・植物・考古・教育園植生他

学術顧問 1名

1969 (S44)～1982 (S57)

館長

学芸職/事務職 1名

学芸員 4～6名

植物・鳥類・地学・魚類・民俗・考古

事務職 4名

技術職 2名

研究員 5名

自然部門 3名  
人文部門 2名

研究委託 11～12名

古生物・貝類・海洋学・発光生物・魚類・昆虫・水質・地質学・考古・民俗・歴史

1983 (S58)～2004 (H16)

館長

学芸職/事務職 1名

学芸員 6～8名

植物・昆虫・甲殻類・ピオトープ・考古・歴史・歴史建築物

事務職 5名

技術職 2名

非常勤職員 1名

研究員 8～3名

岩石・菌類・鱗翅類・発光生物・鳥類・考古・民俗・貝類

昆虫・近代化遺産・民俗

図 5

---

新しいテーマでは「ニュートリノ展」という初めて理工系の展示を、小柴昌俊先生がノーベル賞を受賞されたということで、東京大学の総合研究博物館の移動展の一環として私どもの博物館で実施したということです。人文科学系が18回。ほぼ1年ごとに自然と人文部門が交互に特別展の企画をしております。あと自然と人文部門が共同で実施した企画が2回あります。「天神島の自然と歴史」と「縄文時代の人と自然」というテーマで、自然と人文の両学芸部門が共同で企画しました。博物館の特別展示で特に誇れることは、今までほかの施設から資料を一度も借りたことがない、すべて自前の資料で行ってきたということは自信を持って言える部分かと思えます。

今日説明をしているプレゼンテーションの内容は後ほど皆さんに資料をお配りできるように印刷してありますので、お持ち帰りください。

「博物館職員の変遷」について説明いたします(図5)。これは1954年から1968年、1969年から1982年、1983年から現在2004年までの三つの大きな時代区分になっています。何が境界になっているかという、久里浜時代と、自然博物館ができて移ったときと、人文博物館が新設されて現在の総合博物館のスタイルになったときがそれぞれ大きな転換期になっています。当初は学芸員が2名から3名、館長職の1名は今も変わっておりません。館長職は学芸員であった方もおりますし、事務管理職としての仕事をされていた方もおります。

学芸員数は建物が大きくなるに従って増えています。傾向としては、学芸員の専門職としての内容がだんだん変わってきていることです。学芸員が退職し新しい学芸員を採用するに際しては、幾つかの考え方があろうかと思えます。それぞれの分野で博物館での収集なり、研究してきた分野をそのまま引き継いでいける後任の学芸員を迎え入れるという考え方と、これから新しい横須賀市の博物館のイメージづくりのためには、資料の保存整理については学芸員本来の業務であるので、新しい部門の新しい分野を求めるべきだということであれば、新進の研究なり調査ができる学芸員を迎え入れようという意見もあります。従って、最近ではジオトープの研究を専攻した方とか、歴史建築物など、最近の市民ニーズに合わせた学芸員活動ができる人を館の職員として迎え入れています。事務職員の数はおかげさまで少しずつ増えております。

また横須賀市の博物館では研究員や研究委託という制度を最初から導入しました。研究員は現在も続いており、研究委託制度は、博物館に収納されているさまざまな資料について標本整理など、なかなかほかどらない部分を、専門の先生方や専門家の方たちに博物館での作業をお願いしております。研究員の場合は教育委員会から辞令が出るので職歴換算ができます。研究委託のほうは辞令もなく、あまり十分なお手当もなくボランティア的な協力をいただいております。当時は学術顧問として1名、元国立科学博物館館長だった岡田要先生をお願いしておりました。横須賀市博物館の基本的な運営のノウハウを初代館長が岡田先生からいろいろ指導を受けていたという状況でした。この学術顧問制度と研究委託制度はその後なくなりまして、

現在は研究員制度だけになっています。

「教育普及活動の変遷」について説明いたします（図6）。こちらにも非常にさまざまなものがありまして、今データベースとしてまとめましたが、50年間分を整理しますとかなりの量になります。手短かにまとめたのがこの図で、長く現在までも続いているのは講演会です。ただし傾向は実施回数を見ていただくとわかりますが、ピークはやはり1969年から1982年までの当時です。ご存じのように最近では講演会という企画は、どこの館もそうであるとは言えませんが、横須賀市の博物館ではなかなか講演会そのものに参加される方が少なくなりました。最近のようにインターネットでもいろいろ著名な講師の話が聞けるとか、ITが非常に進む中で、生ではなく二次資料（情報）でも良いという方も多いので、講演会への直接参加というのは少なくなっています。

郷土研究発表会は開館当初から博物館で実施していますが、これまでは年2回ということでしたが、現在は人文系の「郷土研究発表会」と自然系の「博物館フォーラム」という形式で、自然系のほうは市民を交えて横須賀の環境や自然のことについて考えるという研究発表方式に変わっています。現学芸員の中には郷土研究発表会で学生時分に何回も発表された方が多く、そういう人の中から将来博物館の研究員や、研究委託者を選べるという要素がこういう事業の中に含まれていたわけです。あと、今どき「採集展」などというような話になりますが、当時は



図6



## 調査・研究活動の変容

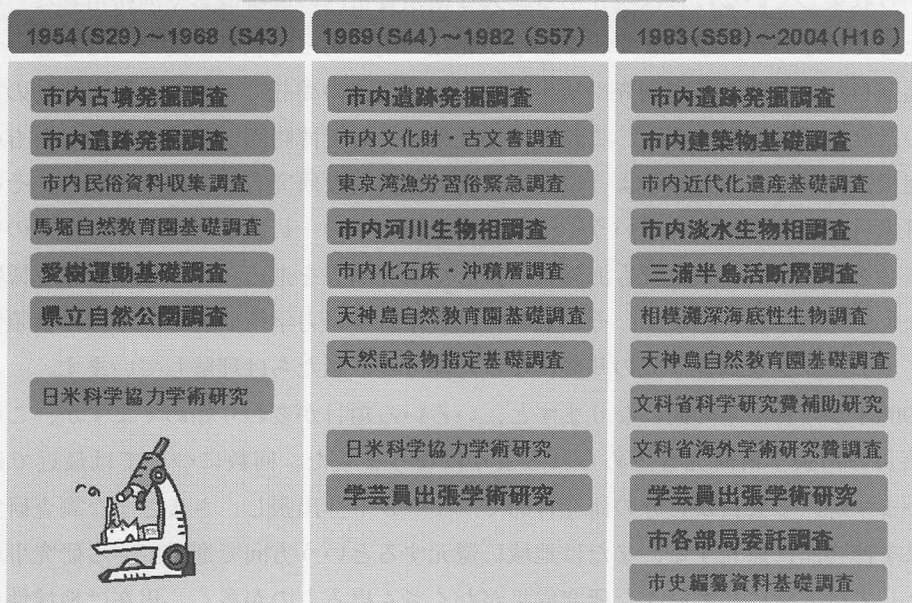


図 7

「夏休み採集展」というのがありまして、実は私もこの採集展に出品していた記憶があります。その後は「夏休み自由研究相談会」という形に変わり、現在は「夏休み体験学習」というように、これも時代の流れでいろいろと変化しています。

やはり根強い行事が自然観察会です。1954年(昭和29年)に既に自然観察会という言葉を使った野外で生き物の生態を観るという企画を実施したというのは、博物館界の中では画期的だったと思いますし、恐らく日本の博物館の中でも五本の指に入るほど古いスタートを切った施設ではないかと思います。多分この自然観察会という事業は横須賀市の博物館にとってその後非常に重要な位置づけとなる教育普及活動であったと思いますし、現在も継続しています。

郷土の歴史、史跡を見る会は現在、博物館教室という事業名に変わり、年間6教室、年間28回の催しがあります。映画会ですが、やはり時代の流れで、今博物館に映画を鑑賞に来るということはありません。かつては46回という異常な回数で、毎週土曜日、日曜日は必ず上映していたという感じでしたが、現在は開演していません。

次に「調査・研究活動の変容」について説明いたします(図7)。開館当初は市内古墳発掘調査や遺跡発掘調査などがあり、これは久里浜時代の博物館におられた赤星直忠先生、考古学の分野では大変立派な業績を残された先生で、その赤星先生が中心になって行っていた調査があります。横須賀考古学会の会員の皆さんにお手伝いいただき、博物館がその調査活動をサポート

するという形式が非常に多かったと思います。また民俗資料の収集は当時から行っており、このころから収集していなければ現在ある膨大な横須賀市内の農耕機具や漁撈用具などは集まらなかったのではないかと思います。なかなか先見の明のあった収集活動だったと思います。

あと馬堀自然教育園の基礎調査や植生調査、横須賀市の委託で実施した愛樹運動の基礎調査、観音崎の県立自然公園調査など、これらは委託事業として博物館が受けて実施したものです。当時の羽根田館長は、ご存じのように発光生物の世界的な研究者でもありました。その羽根田館長は日米科学協力学術研究という一つの研究組織の中の一員になられ、そのためのさまざまな研究基金を活用され、ご自身も海外に出張して研究調査を進められ、その成果を博物館にいろいろな形で発表されています。その意味では日米科学協力学術研究というのは横須賀市の博物館のアカデミックな調査研究の基盤になった部分だと私たちは理解しています。

次の1969年から1982年の間になりますと、いろいろ項目が変わり始めてますが、この時期に大体学芸員の出張学術研究も認められるようになりました。回数については最近では少なくなっていますが、学芸員が自分の研究目的でフィールドへ出張し、さまざまな調査研究を進め、その成果を博物館に還元する、または地域に還元するという方向で進めている研究事業です。博物館としては非常にユニークな研究成果がたくさん出るものが多く、現在は地域性を活かした調査テーマが中心になっています。文部科学省の研究費補助金も積極的に申請し、国内研究を主体としているテーマと、海外学術研究に協力する研究テーマもあります。最近では市の各部局からの委託調査等もあり、現在は市史編さん資料の基礎調査にも加わっています。

「博物館のコレクション・ビルディング」について説明いたします（図8）。おかげさまで開館50年ともなりますと、大変多くのコレクションが収集できました。もちろん学芸員が集めてくる資料等もたくさんありますが、地域の方々や専門家の方々がさまざまなコレクションを寄贈してくれるというケースも多くなりました。寄贈いただいたコレクションは目録をつくり、出版するということから、さまざまなコレクションが増えました。主なものでは、自然科学系では「細谷コレクション」があり、模式（タイプ）標本を含めて約1万4,000点の貝類コレクションが博物館でも大きなコレクションの一つだろうと思います。それから大野さん・伊藤さん・古屋さん等が寄贈された蝶のコレクションがあり、特に大野さんが寄贈された約1万5,000点に近い蝶のコレクションには貴重な標本が含まれ大変すばらしいものです。その他では、現葉山しおさい博物館である、当時の葉山郷土館で学芸員をされていた故川瀬ツル先生が収集された三浦半島の海藻コレクションが博物館に寄贈されています。それと初代館長の羽根田先生が収集された発光生物のコレクションは、世界でも横須賀市の博物館が誇れる特別なコレクションといえます。

人文科学系のほうにも幾つかありまして、その中でも非常に資料点数が多いものは赤星直忠考古学コレクションです。考古部門の寄贈資料は整理が進むと登録資料点数がもっと増えるの

## 博物館のコレクション・ビルディング

### 自然科学資料

- 細谷・平瀬・中見川貝類コレクション 約14000点 (模式標本を含む)
- 大野・伊藤・古谷蝶類コレクション 約20000点
- 神部蛾類コレクション 約10000点
- 川瀬三浦半島海藻コレクション 約 4000点
- 青柳魚類コレクション 約 500点 (模式標本を含む)
- 羽根田発光生物コレクション 約 1300点 (模式標本を含む)

### 人文科学資料

- 石井近代造船所建築図面コレクション 約 230点
- 赤星考古コレクション 約30100点
- 三浦半島漁労用具コレクション(国指定重要有形民俗文化財) 約 2700点
- 藤原古墳出土埴輪ほか考古資料(市指定重要文化財) 約 1600点
- 吉井貝塚出土縄文時代早期骨角器(県指定重要文化財) 約 400点
- スチームハンマー(オランダロッテルダム製・国指定重要文化財) 2点

### 文献資料

- 日高文庫(海洋学) 約 1000冊
- F. I. 辻文庫(自然科学) 約 1000冊
- 大谷文庫(植物学) 約 1000冊
- 赤星文庫(考古学) 約10000冊
- 阿部文庫(魚類学) 約35000冊
- 小田原文庫(甲殻類学) 約 2000冊

図 8

## 自然・人文博物館の今後の課題

### 自然・人文博物館

- 建築物の老朽化
- 耐震化工事の施工
- 飽和状態の収蔵施設
- 燻蒸と防虫対策
- 収蔵資料のデータベース化
- 展示室の更新

### 自然教育園

- 緑地保全区域境界の都市化
- 保護海域の環境劣化
- 海域活用形態の変化
- 駐車場スペースと料金制
- 本館と分園・分館の運営予算

図 9

ではないかという感じがします。それから国の重要有形民俗文化財に指定された三浦半島の漁撈用具コレクションもかなり大規模な点数にのぼります。一番新しいものでは現在JR横須賀駅の隣にあるヴェルニー記念館にも、国指定の重要文化財であるスチームハンマーが2基あり、これも博物館のコレクションの中では誇れるものだろうと思います。あとこれまでに博物館と深い係わりのあった多くの先生方が文献資料や図書を寄贈されています。これらは順次目録作成を目指しておりますので、今後は利用していただけるものと思います。

まとめとして「自然・人文博物館の今後の課題」について説明いたします(図9)。これまで比較的推進事業的な側面ばかりを説明しましたが、50年経過した今、これからをどうするかという問題が残ります。まず本館のほうでは、建物の老朽化が大変ひどくなっています。耐震化工事を施工しないと建物の構造維持が難しいということがあります。そのため建物の老朽化と耐震化工事のことを考えますと、常設展示の更新は抜本的にできないという結論になります。収蔵室は見ていただくとわかりますが、資料の収納状況は飽和状態で、燻蒸や防虫対策も難しくなっている収蔵室もあります。また現在、収蔵資料のデータベース化も急務であり、今後できるだけ利用者には情報提供できるようにしたいと考えております。

自然教育園のほうでは、緑地保全区域と境界域の都市化の問題があります。特に馬堀自然教育園は周りがどんどん宅地化しているので、その境界線の領域でいつもいろいろな問題が起きることになります。それから保護海域の環境劣化と海域活用形態の変化。この問題は主に天神島臨海自然教育園のほうで、海をレジャー目的で使うさまざまな形態が現れていますので、博物館では保護海域の管理ということで幾つかのルールを設けています。そのルールの見直しが必要ではないか、また新しいルールづくりも必要なのではないかということです。いずれの教育園も駐車場スペースの問題と、場合によってはそれを料金制にしてはどうかという話もあります。無料であるといろいろな目的で使用され、本来教育園にみえた方たちが駐車場を使えなくて迷惑するという場合があります。本館と分園・分館の運営予算形態では、これからも分園と分館が多くなると、本館の運営予算に食い込みが生じるので、今後大所帯型になったときの予算化をどう工夫するか。また将来、国の独立行政法人化の導入に伴い、そろそろ地域博物館についても公益施設の管理方針を検討するという状況を真剣に考える時期であると思います。

雑駁ではございますが、横須賀市の博物館の50年の流れをこれだけで説明できることではないのですが、それなりに50年間歩んでまいりました歴史を紹介させていただきました。今後ともさらに新しい転換を図りながら、新しいイメージづくりをしていかなければならないというのが、これからの私たち博物館職員の使命だと思っております。今後ともよろしくご指導いただければと思います。と同時にこの50年の間に既にお亡くなりになられ、長く博物館を支えていただきました諸先輩がたくさんいらっしゃいました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。(拍手)